

2025年度 大学評価統括本部 外部評価(意見交換会)レポート

2026年3月27日(金)、東洋大学白山キャンパスにおいて、「2025年度 大学評価統括本部における外部評価及び意見交換会」を実施した。

今回の意見交換会では、外部評価委員である廣安知之氏(同志社大学副学長)と宮原京子氏(ファイザー株式会社取締役執行役員)をお招きし、事前の書面評価結果をもとに講評を行っていただいた。

東洋大学からは矢口悦子学長を本部長とする、大学評価統括本部員が参加し、書面評価及び講評いただいた内容について、意見交換を行った。

○はじめに

意見交換会の開催にあたり、矢口本部長より、外部評価委員の両名に御礼が述べられた後、進行説明がなされ意見交換に入った。

○外部評価委員からの講評

内部質保証システムの実効性について

- ・ 内部質保証システムの実効性について、全体的には高く評価できる。貴学の『自己点検・評価報告書』の中においても、全てできているという評価ではなく、課題点も把握できているため、内部質保証の取り組みとしては十分に評価できる段階にある。
- ・ 内部質保証の推進にあたっては、現在の結果がベストかどうかということよりも、PDCA サイクルを機能させることができているかどうか重要である。その観点から言えば、PDCA サイクルの Plan と Do の段階は着実に進展しており、実質的に機能しつつある発展段階にある。今後は Check と Action を組織的かつ継続的に展開させることが課題である。
- ・ 「未来を哲学する」というキーワードは、非常にユニークであり他に類を見ない独自性である。これからの時代は哲学を通じて自ら問いを立てていくということが重要であり、AI 教育の根幹にも通ずるものであるため、その点が貴学の魅力であると言える。
- ・ 学長自らが延べ 170 時間以上を費やし全ての教学プロジェクトをレビューするというプロセスは、組織全体に対して変革の熱量を浸透させていくための重要な取り組みである。一方で、トップの熱量に対して現場がどこまでついてこられるか、という点においてはどの組織においても課題であり、まだ少しばらつきがあるように感じるため、そこを丁寧に繋いでいくことが重要である。
- ・ 経営のためのパーパス、いわゆる企業理念に相当するものは非常に明確であるため、それを実践するための仕組みも構築されているが、学長のコミットメントをもう一

段教育現場の末端まで広げ、教職員が動きやすい仕掛け等については標準化を通じて浸透させることが望まれる。

- ・ 目標を単なる計画の「実施」で終わらせることが無いよう、実際のアウトカム(例えば学生の学びの成長)に対してどのようにコミットするかということについて、産業界におけるプロジェクトマネジメント手法を導入するなど、標準化を検討することが望まれる。

教育 DX 推進基本計画の進捗について

- ・ 「総合知」教育は、分野横断的な学びを可能にする学習者本位の取り組みであり、社会のニーズに応える先進的な試みである。利用率向上のため、学生へのインセンティブ付与や広報の強化、ダブルメジャー等の制度化の検討が望まれる。
- ・ 教育 DX においてプラットフォームは構築したが、学修成果確認システムの学生利用率が 40%という数字は改善の余地がある。学生にとって必須のツールとなっていないことが原因であると考えられるが、海外の大学においては必須となっている場合もあるため、プラットフォームやデータの一元化も考えられる。一方で膨大なデータの取扱いについては、教職員が円滑に利活用できるために AI の積極的な利用について検討することも必要であろう。
- ・ 新学年暦(13+2)による時間的余白の創出は多様な学び(留学、インターンシップ等)に挑戦する機会を提供する優れた設計である。生み出された時間における学修の質を担保し、正課と課外活動の融合を図るため、オープンバッジやクロスメジャー、マイナーメジャー等の認定の仕組みの検討が望まれる。

○おわりに

金子副本部長より、東洋大学への助言及び励ましの言葉に対して御礼が述べられ、内部質保証システムの実効性と教育 DX 推進基本計画の進捗において、長所・短所に言及いただいたことを踏まえ、創立者井上円了の理念を浸透させることを通じて、本学の特徴化をより推進することが表明され、閉会の挨拶とした。

以 上